

従足利将軍鷲見氏代々江感状写

足利将軍より鷲見氏代々え感状写

一 美濃国鷲見郷相伝次第

一 美濃国鷲見郷相伝（一）次第

武蔵権守 郡上太郎法名寶仲 同三郎法名寶佛

武蔵権守 郡上太郎法名寶仲 郡上三郎法名寶佛

○頼保……………重保……………家保……………

○頼保……………重保……………家保……………

同太郎

同（郡上）太郎

保吉

保吉

同藤三郎 彦三郎 藤三郎 同中務少輔論入

同藤三郎 彦三郎 藤三郎 同中務少輔論入

諸保……………長保……………忠保……………加々丸……………

諸保……………長保……………忠保……………加々丸……………

康安二十七年死去

康安二十七年（二三八七年）死去

同藤三郎

同藤三郎

保憲

保憲

同中務彦五郎 同中務彦六

同中務彦五郎 同中務彦六

氏保……………行保……………

氏保……………行保……………

郡上郡同城居住之仁者

郡上郡同城居住之仁は

東下総権守

東下総権守

玉井三郎

玉井三郎

鷲見藤三郎

鷲見藤三郎

①

①

守護所下

守護所下

藤原

藤原

鷲見郷下司字郡上三郎 間事 家保

鷲見郷下司字^{げし}郡上三郎 間事（尋事） 家保

右件之家保今月四日可申賜武蔵守殿御消息云郡上三郎今度自鎌倉奉付御共令上洛之上件郷相傳之由云々早相尋次第證文可令安堵之由蒙仰之間深重證文明白也仍可令安堵之由下知如件

右件（くだん）の家保、今月四日、武蔵守（泰時）殿御消息に申賜うべく云、郡上三郎、今度鎌倉より御供附け奉り上洛せしむの上、件ノ郷相伝ノ由云々。早證文相尋ね次第安堵せしむべく由、仰せを蒙るの間、深重の証文明白なり。仍て安堵せしむべく由下知、如件（くだんのごとし）

承久三年七月日

承久三年七月日（一二二一年）

守護所源 御書判

守護所源 御書判（土岐光行力）

② 美濃国御家人鷲見三郎入道
寶仏諸大番役事□んわ安吉分ヨリ
七月一日至八月十五日三かわ諸安分ヨリ
八月十六日至九月朔日於
大門二条西土門被物仕候仍執達
如件

左衛門丞 書判
沙彌 同
弘安八年十月四日
左衛門 同

② 美濃国御家人鷲見三郎入道寶仏(家保)、
諸大番役事(おわり)、安(保)吉分、
七月一日より至八月十五日、三日わ諸安(保)
分八月十六日ヨリ至九月一日、
内裏二条西土門に於いて物仕られ候、
仍て執達件の如し

(土岐光行)
左衛門丞 書判
沙彌 同
弘安八年十月四日
左衛門 同
(一二八五年)

③ 美濃国御家人郡上郡鷲見
藤三郎忠保下賜 令旨之間
五月八日馳参九日近江国於馬場
前山依致合戦ヤレ不見若党森六郎
忠重討死同舍弟七郎重信
被疵左膝被射之条御実檢之上意ヤレ不見令力
賜御判可備後證之龜鏡候以
此旨可有御被露候恐惶謹言

元弘三年五月十二日藤原忠保上
進上 御奉行所 御書判
見及了

④ 美濃国御家人郡上郡鷲見
藤三郎忠泰五月廿七日令馳参候
以此旨可有御被露候恐惶謹言

元弘三年六月一日 藤原忠泰上
進上 御奉行所
承了 御書判

③ 美濃国御家人郡上郡鷲見藤三郎忠保、
旨をして下し賜うの間、
五月八日馳参じ、九日近江国江前山より馬
場に於いて、合戦致す(ヤレ不見)
若党森六郎忠重討死、同舍弟七郎重信
疵を被る(左膝、射られる)の条、御実檢
の上意(ヤレ不見。令力)
御判を賜り、後證の龜鏡に備うべく候。此
旨を以て御被露有るべく候、恐惶謹言
(一三三三年)

元弘三年五月十二日藤原忠保上
進上 御奉行所 御書判
見及了

④ 美濃国御家人郡上郡鷲見藤三郎忠泰(保)
五月廿七日馳参じ(せしみ)候、(上京)
此旨を以て御被露有るべく候、恐惶謹言

元弘三年六月一日 藤原忠泰上
進上 御奉行所
承了 御書判(尊氏ナルベシ)

⑤ 着到

美濃国郡上郡御家人鷺見
藤三郎忠保代鷺見孫八常良
申右着到如件

建武三年六月廿三日

一見了

御書判

⑤ 着到（到着したと申し出る）

美濃国郡上郡御家人鷺見藤三郎忠保
代鷺見孫八常良
右申す到着、件の如し
（一三三六年）

建武三年六月廿三日

一見了

御書判（ ）

⑥

美濃国郡上郡御家人鷺見
藤三郎忠保馳参洲俣
土岐左近藏人殿属御手今月
十四日森山合戦同十六日宇治馳向
候畢同十七日十八日十九日西阪本
中尾致合戦忠節候畢就（然）之為
後證下賜御一見状増弓箭勇
言上如件

建武三年六月廿五日

進上 御奉行所

一見了

御書判

⑥

美濃国郡上郡御家人鷺見藤三郎忠保、
洲俣ニ馳参ジ、
土岐左近藏人（頼遠）殿の御手ニ属シ、
今月十四日森山（近江）ニ合戦シ、同十六
日宇治ニ馳向イ候畢（おわんぬ）、同十七日
十八日十九日西阪本中尾ニ合戦忠節致シ候
畢、然るに之（之において）、後證ノ為ニ御
一見ノ状ヲ下シ賜イ、弓箭ノ勇ヲ増シ
言上、件の如し

建武三年六月廿五日

進上 御奉行所

一見了

御書判（土岐頼遠）

⑦

美濃国郡上郡御家人鷺見
藤三郎忠保申去晦日馳向二
条大宮属御手至五条大宮竹
田追懸御敵抽随分軍忠畢
然者早賜御證判為備向之
龜鏡相所勤如件

建武三年七月三日

進上 御奉行所

一見了

御書判

⑦

美濃国郡上郡御家人鷺見藤三郎忠保申、
去晦日（みそか）、二条大宮に馳向イ、
御手ニ属シ、五条大宮竹田ニ至リ、御敵ヲ
追懸、随分軍忠抽（ぬきん）デテ畢（おわ
んぬ）、然者（しかれば）早ク御證判ヲ賜リ、
向之龜鏡（手本、証拠）ニ備エル為ニ相勤
メル所、件の如し

建武三年七月三日

進上 御奉行所

一見了

御書判（土岐頼遠）

⑧

美濃国藤三郎忠保事

今月十日當国於関迫北野馳

向御敵尾崎宮致合戦忠討

留数輩御敵候畢此条東

中務丞殿并土岐左兵衛藏人殿

代出雲公相共被合戦候之上者

以見分明候歟然為後證欲賜

御一見状候仍如件

建武三年八月十日

御奉行所

承了

御書判

⑧

美濃国藤三郎忠保事

今月十日當国関、迫（はざこ）、北野ニ於イ

テ、

馳向イ、御敵尾崎宮（と）合戦致シ、忠数

輩ノ御敵討留（うちとめ）候畢（おわんぬ）、

此条、東中務丞殿（常頭）并ニ、土岐左兵

衛藏人（頼遠）殿代出雲公相尤合戦致し候

之上は、見分を以て明候歟。

然れば後證の為に御一見状を賜らんことを

欲し候。

仍（よつて）如件

（一三三六年）

建武三年八月十日

御奉行所

承了

御書判（土岐頼遠か）

⑨

驚見藤三郎忠保申今月十三日

馳向八代城致合戦忠之處一族

孫四郎被疵左頸骨射疵若党

弥三郎被疵左足訖是等之子細

同時合戦之間東中務丞土岐

左兵衛藏人殿代出雲公令見

知畢見言上同時御合戦間

不及子細候且給御證判為備後

日龜鏡言上如件

建武三年八月日藤原忠保

進上

御奉行所

承了

御書判

⑨

驚見藤三郎忠保申す、今月十三日

八代城に馳せ向かい、合戦致し、忠之處、

一族孫四郎被疵左頸骨射疵、若党弥三郎被

疵左足、訖是等之子細同時合戦之間

東中務丞、土岐左兵衛藏人殿代、出雲公

令見知畢見言ノ上、同時ニ御合戦間

子細及ズ候。且御證判給ワリ、後日ノ龜鏡

ニ備エル為ニ言上如件

建武三年（一三三六年）八月日

藤原忠保

進上

御奉行所

承了

御書判（ ）

⑩ 鷲見藤三郎忠保申、今月三日
馳參城田屬飛驒殿御手同
廿四日馳向八代城打入城内令致
軍忠頌一打取一族林孫三郎
被疵右手尋之疵頌当日被遂
御実檢畢是等次第東中務丞
佐竹太夫同時令合戰令見知者也
且給御證判為備後日龜鏡言上
如件

建武三年九月廿六日藤原忠保
進上 御奉行所
承了 御書判

⑪ 切紙
師直師泰誅伐之事
早馳參御方可被
軍忠之状如件

觀應元年十一月三日 御書判
鷲見藤四郎殿

⑫ 切紙
師直師泰誅伐之事
於濃洲被忠節重
尤以神妙弥可勵戰功
之状如件

觀應二年二月十五日 御書判
鷲見藤四郎左衛門慰殿

⑬ 高倉禪門没落北国分
早可被忠節了如件

觀應二年八月十二日 御書判
鷲見加賀殿

⑩ 鷲見藤三郎忠保申、今月三日
城田ニ馳參ジ、肥田殿（土岐氏）御手ニ属
シ、同廿四日、八代城ニ馳向、城内ニ打入、
軍忠致しむ。頌一打取、一族林孫三郎
被疵右手尋之疵頌、当日被遂御実檢畢。
是等次第、東中務丞、佐竹太夫（上有知莊
佐竹次郎三郎義基）同時令合戰令見知者也。
且御證判給い、後日ノ為ニ備え龜鏡言上。
如件

建武三年（二三三〇）九月廿六日藤原忠保
進上 御奉行所
承了 御書判（ ）

⑪ 切紙
高師直、師泰、誅伐の事
早御方へ馳參じ軍忠せらるべきの状如件
（くだんのごとし）
觀應元年（二三五二）十一月三日
御書判（足利直義）

鷲見藤四郎殿

⑫ 切紙
師直、師泰、誅伐之事 濃洲に於いて忠
節重ねられ 尤（もつとも）神妙をもつ
て弥、戦功勵（はげむ）べくの状、如件（く
だんのごとし）
觀應二年（二三五二）二月十五日

御書判（足利直義）
鷲見藤四郎左衛門慰殿

⑬ 高倉禪門（足利直義）没落北国分
早忠節せらるべくよつてくだんのごとし。

觀應二年八月十二日
御書判（足利尊氏）
鷲見加賀殿

⑭ 嗽訴輩誅伐事早

属甚河参川三郎入道

成川手可被軍忠之状如件

觀應二年八月廿六日 御判

鷲見四郎左衛門慰殿

⑭ (直義軍勢催促状)

嗽、訴輩誅伐の事、早く、甚河、参川三郎入道成川の手属し、軍忠なさるべく之状、如件

觀應二年(一三五二) 八月廿六日

御判

鷲見四郎左衛門慰殿(保憲)

⑮ 鷲見加賀丸軍忠事

属当御手三月廿六日尾州大山寺

合戦御敵追落し同廿九日勢田

宮口合戦捨身命致忠節之条

大将御見知之上者賜御證判 彌

為致忠節言上如件

觀應三年四月日

承了 御書判

⑮ 鷲見加賀丸軍忠事

当御手属し、三月廿六日、尾州大山寺

合戦御敵追落し、同廿九日勢田

宮口合戦、身命を捨て忠節致すの条

大将御見知の上、御證判を賜り、いよいよ

忠節致し為すこと言上。如件

觀應三年(一三五三) 四月日

承了 御書判(土岐頼康)

⑯ 鷲見加々丸中軍忠事

去年九月廿一日属御手押寄伊

岐津志城及種々合戦訖而当年

三月十日同属御手於在々所々焼

佛御敵屋形畢自甚以来雖為

片時不奉離御手於被昼夜堅

固之處六月十六日吉良治部太夫殿

石堂殿原蜂屋宇津宮参川三郎

以下之輩大勢寄来之時馳向長森

追懸御敵至郡戸追落之三條御

見知之上者賜御證判 為 備

向後龜鏡粗言上如件

觀應三年七月廿五日

承了 御書判

⑯ 鷲見加々丸中軍忠事

去年九月廿一日、御手に属し、押寄せ伊岐

津志城及種々合戦訖而、

当年三月十日、同じく御手に属し在々所々

に於いて、御敵屋形を焼き佛い畢ぬ。甚れ

より以来、片時と為すと雖も離れ奉らず、

御手昼夜に於いて堅固せられるの處、六月

十六日、吉良治部太夫(貞家)殿、石塔頼

房殿、原、蜂屋、宇津宮、参川三郎、以下

之輩大勢寄来之時、長森へ馳向い、御敵

を追懸け、郡戸に至り、之を三条に追落し、

御見知の上は御證判を賜り 向後の為に龜

鏡に備え粗あら言上す、如件

觀應三年(一三五三) 七月廿五日

承了 御書判

⑰

此重保ハ相傳之御家人
故不代時一の入見参朝夕
之劳令候安堵し小嶋慥妨
甚不穩便
せし

左候故

郡上太郎重保重申状如此
停止小嶋三郎慥妨慥可令
安堵之旨先度下知了而猶
不承引にて何様事哉早糺迫
損也如本可令安堵其身之由
可令下知仰之状如件

三月十五日

後書判

遠江守殿

⑰

(袖書) (鎌倉下知状か)

此の重保ハ相傳之御家人故
不代時一の入見参朝夕の劳令候
安堵し小嶋慥妨
甚(はなはだ)不穩便せし
左候故

郡上太郎重保、重ねて申すの状、此の如き、
小嶋三郎慥妨(たし)かに停止、
之を安堵せしむべくの旨、先度下知了而、
猶不承引にて何様事哉、早糺迫損也、
本の如く其身安堵せしむべくの由、仰之状
下知せしむべく如の件し

三月十五日

後書判

遠江守殿(北条時政力)

⑱

鷲見加々丸申軍忠事
伊勢国御向之時属御手
於阿坂城中村口御合戦之時
捨身命被忠節条御見知之
上者賜御證判候弥忠勤言上
如件

文和元年十月廿三日

承了

御書判

⑱

鷲見加々丸申す、軍忠の事
伊勢国御向之時、御手に属し
阿坂城において、同中村口御合戦之時
身命を捨てて忠節せらる条、御見知の上は
御證判賜り候弥、忠勤言上如件

文和元年(一三五二)十月廿三日

承了

御書判

⑲

康行御退治事馳向在所可
被忠節之状依仰執達
如件

明德元年閏三月六日左衛門佐判

鷲見中務少輔入道殿

⑲

土岐康行御退治の事、在所に馳向い
忠節せらるべきの状、依って仰執達如件

明德元年(一三九〇)閏三月六日

左衛門佐判(吉良満義)

鷲見中務少輔入道殿

⑳

御書判

美濃国郡上郡之内鷺見郷河
西河東地頭職事以相傳鷺見
中務少輔入道禪峯可令領
掌之状如件

明德元年九月六日

㉑

御書判

美濃国郡上郡の内鷺見郷河西河東
地頭職の事、鷺見中務少輔入道禪峯、
相傳を以って領掌せしむべくの状如件

明德元年（一三九〇）九月六日

㉒

鷺見中務少輔入道禪峯申

美濃国郡上内鷺見郷河西

河東地頭職事申状是書如此早

逮伊賀彦十郎時明違乱全禪峯

執達如件

明德三年六月三日右京大夫書判

土岐刑部少輔入道殿

㉒ （足利將軍家御教書）

鷺見中務少輔入道禪峯申す。

美濃国郡上内鷺見郷河西河東地頭職の事、
申状具書かくの如し、

早く伊賀彦十郎時明の違乱を全て禪峯逮

（おいか）け執達如件

明德三年（一三九二）六月三日

右京大夫書判（細川満元カ）

土岐刑部少輔入道殿（土岐頼忠）

㉓

北畑少将満雅朝臣討治事

不日令發向属守護人手可抽

忠節之由所被仰下也仍御執達

如件

應永廿二年四月十六日沙弥書判

鷺見中務入道殿

㉓

北畑少将満雅朝臣討治の事

不日（すぐに）向かい発せし守護人の手に

属し忠節ぬきんずべくの由、仰下さるとこ

ろ也。よって御執達如件

應永廿二年（一四二五）四月十六日

沙弥書判

鷺見中務入道（鷺見氏保）殿

㉔

芥見荘長山彦五郎以御判紙永賜之

本主山川判官返賜之

井深荘石村 本主但島前司返賜

鷺見郷河西 糟屋弥六本主加々丸

㉔

芥見荘長山彦五郎（氏保）以御判紙を以て永

くこれを賜う

本主山川判官之を返し賜う

井深荘石村 本主但島前司返し賜う

鷺見郷河西 糟屋弥六本主加々丸

この文書の翻刻は「高鷲古文書読み会」が行った。読み下しについては、「鷲見家史跡」も参考にしている。

◎考察

この足利將軍よりの感状は、鷲見氏保がまとめたものと思われる。最後の長山彦五郎が氏保であろう。とすると芥見庄の長山を名字にしていたということは、芥見庄の荘官だった可能性もある。

長山彦五郎については大和村史には次のように書いてある。

「芥見八幡神社の宮司宮本家に伝わる鷲見氏系図には鷲見氏保のことを長山彦五郎と書いてある。郡上に伝わる系図には郡上中務彦五郎と書いてある。

当時地名を名字にしていたことを考えると、郡上では郡上彦五郎と名乗り、芥見では長山彦五郎と名乗っていた可能性はある。」

⑰の「関東下知状」には鷲見郷とも芥見郷とも書いてないが、小島三郎が岩滝郷なので、芥見郷への慥妨が自然だと思われる。とするとこの感状が鷲見郷のみのことが書いてあるのが気になる。

※『岐阜県史 史料編 古代・中世』一（岐阜県、昭和四十四年（一九六九）三月）七六三頁上、

「三 長善寺文書 ○郡上郡高鷲村」に、長善寺文書、表紙ニ「從足利將軍鷲見氏代々江感状寫」トアル一冊ニ収メラレテアリ、コノ文書ハ、所謂「鷲見家譜」ト呼バレテイルモノニシテ、「鷲見家譜」ハ、山縣郡高

富町鷲見八千代氏・名古屋市西区山田町鷲見英保氏ニモアリ、

イマ、長善寺文書ニ據リテ採ル、マタ、東京大學史料編纂所影寫本「鷲見文書」（大正十三年、所蔵者不詳）モ、同系統ノ書ナリト雖モ、若干ノ異同アリ、

ナホ、コノ文書疑義アリト雖モ、参考ノタメココノ掲グ、とある。